

## 『俱舎論註ウパーイカー』の研究

本 庄 良 文

### 一 シャマタデーヴァ『俱舎論註ウパーイカー』翻訳

失礼いたします。過分のご紹介に預かる間に、さまざまなことを思い起しておりましたが、今回の出版がこの大谷大学にルーツを持つということがその第一でございます。すなわち、櫻部先生が始められた研究を私のような者が引き継いで、曲りなりにも全部の翻訳をさせていただくことができたのは、この大谷大学の伝統に負うところが大きいのであります。

今回は、その翻訳について話せということでございますが、せっかく晴れがましい場所にお招きいただきましたので、ご迷惑ですが、やや個人的な事柄や、学恩を受けた先生方の話をさせていただき、むしろ『ウパーイカー』は少し脇におくようなことになるかも知れません。また、原稿を用意できませんでしたので、話があちらこちらに行くかも分かりません。その点、ご容赦頂ければと存じます。四頁分の資料（拙著所載の著者略歴、下巻「あとがき」および世品〔302頁〕の一部、三二八―三二九頁）をお配りいただいております。適宜これに依りながら進めて参ります。

## 二 寺の子

一枚目の著者略歴に参ります。京都府内の浄土宗（鎮西）のお寺の長男として生れました。両親とも戦争世代で、父親は大正十一年生れ、母親は大正十五年生れです。お寺に育ってそれなりに思うところがありました。子供の時は、「よその家とは違うな」程度のことでしたが、中学校入学の前後だったでしょうか、思春期特有の潔癖な考えから、お寺の、特に浄土宗のお寺の現状について色々疑問を抱くようになりました。だいたいお坊さんは結婚してはいけなはずなのになぜ自分がいるのか、から始まって、いちいち申しません、要は「墮落している」ということあります。またあらかじめルールが敷かれているのがいやでした。小学校六年の頃には父親に付いて少しお経の稽古をしました。が、中学校からは全くやらなくなりました。ある時何かの授業で、「将来どういう職業につきたいか」という教員からの質問に答えた時、私は「お寺のお坊さん以外だったらいい」と申しました。クラスメートは私が寺の生れであること知っていましたので笑いしましたが、「お坊さんになりたくない」というのは自分の本音でした。ただその時にたまたま教育実習生（当時京都学芸大学三回生）がおられ、たしなめられたのが未だに心に残っております。それは、「何百年、何千年と続いている仏教である。それに対してそんな言い方をしてはだめだ」というのです。小生意気な中学生の胸にちくりとささりましたね。今に至るまで心に残っているということは、私にとって大切な言葉に違いありません。その意味で、その教育実習の学生さんには大変感謝いたしております。

結局お寺を継ぐようになったのは発心してというような、立派なものではありません。二十歳ぐらいになると父親がだんだん歳を取ったと思うようになって、手伝ってやらないと、と思ったのがきっかけです。その頃、高校時代の同級生から「このごろ親が歳を取ったと思わへんか？」といわれて、同感だったのを覚えております。ただし、この僧侶という「職業」が、社会にとって目に見えないところで大切なものであるというのは日々感じているところであ

ります。

### 三 原始仏教

話は前後しますが、仏教の現状に対して批判的であったとともに、「批判する限り、批判する相手のことをちゃんと知っておくべきである」と偉そうなことも思い、大学へ進んだら佛教の勉強をしようとは心に決めていたようです。「ようです」と申しますのは、全国の大学で、佛教またはインド哲学の講座があるところを何度も調べた記憶が確かにあるからです。また、理想的な（つまり墮落していない）、清浄な仏教を求める気持ちも芽生えてきたようです。その下地を作ったのは、父親が買っていた増谷文雄先生と中村元先生の著書でした。中村先生の『ゴータマ・ブツダ』（法藏館）、増谷先生の『仏教百話』（現在、ちくま文庫所収）です。いずれも原始仏典（阿含、アールガマ）を扱ったものです。次いで増谷先生の『原初経典 阿含経』（筑摩書房）を、最初の大学入試の直後、合格発表の前（浪人になる直前）に買い、愛読しました。こうして「阿含」「アールガマ」は、清浄で理想的な最初期仏教のイメージを喚起する、あこがれの言葉となりました。

### 四 インド学研究室

一浪の後、一九七一年四月、京都大学文学部に入学しました。大学に入って仏教学に直結する勉強を始めたのは一九七二年二回生の春、教授昇進直後の梵文学科、大地原豊先生（一九二四—一九九一）からサンスクリットを習った時でした。テキストはペリー（Edward Delavan Perry, *A Sanskrit Primer*, Colombia University Press, New York and London, 1969, First Edition, 1885）。今はなき文学部東館一階南西角の小さな演習室で、最初は十五人ほどがいたのがだんだん減って最後は三人になりました。不注意で、二回目からの参加になってしまったんですが、一回目からちゃんと出てい

た学生さんが秋本勝（京都女子大学）という四十年來の友人です。（後に卒業論文で、『俱舍論』第五章の「三世実行説」を卒業論文のテーマに選び、初めてその箇所を邦訳して『南都仏教』に掲載しました。）

この大地原先生はインド土着文法学の、世界的に名高い先生でした。この先生のさらに先生であるフランスのルイ・ルノー（Louis Renou, 1886-1966）というヴェーダ学、インド土着文法学の權威が「大地原氏はサンスクリットの天才ですよ」と言われたそうです（福井文雅「大地原先生を悼む」『日仏東洋学会通信』第十三号、一九九一年、四頁）。昨年ここで話した佐々木閑君（花園大学教授）が「工学部から文学部へ移って何をするかと思ったら語学ばかりだった。初めて天才に出会った」と言っていました。この天才は天におられてあまり低いところへは降りてこれられない印象でした。（それは今から思えばこちらの責任です。）一九七二年はまだ学園紛争の余波が残っており、たいへんお恥ずかしい話ですが、私もそれに影響を受けました。先生の授業は、ストライキで何回も抜けたために、ついに最後の冬休み前だったかに、文学部東館五階北東の大地原先生の部屋で集中講義のようになってしまいました。そんなわけで消化不良をおこしまして、さっぱり要領を得ないまま一年間が終りました。

一九七三年、三回生になって院生だった佐々木恵精先輩からハガキで案内をもらい、印度哲学、仏教学、梵文学が同居したインド学研究室に入りました。前の二つは哲学科、梵文学は文学科と、学部内での所属は異なるのですが、「サンスクリット文献学を基礎としたインド学（*Indology*）」という統一的な方法論のもとで文献研究を進めるということです。私は大学に入るまで仏教といえば漢文の文献ばかり読むものと思ひ込んでおりましたが、入ったのはイメージとは全く別の世界でした。またこの三学科を「京大インド・仏教学会」としてまとめようとされた中心人物もまた大地原先生のです。（中谷英明「大地原豊先生を偲ぶ」同右『通信』九頁）私の印象によると、ここでは全員が梵文学、特に戯曲や詩文学を読むのが当然のこととされていました。「哲学書を読むにも、サンスクリットを語感から分かるほうがよい」という理由です。西洋の場合もそうなのでありましょうが、もともととは日常の会話で使っていた言葉が

哲学用語になっているので、哲学を勉強するにも語感からわかるようにしなくてはいけないということです。それで思いつくことがあります。パラマールタ (paramārtha) という言葉がありますね。漢字で「勝義」と書き、「眞諦」とも訳される言葉であり、高度な哲学用語です。これが日常用語で出てきてはつとしたことがあります。皆さんに申し上げると釈迦に説法ですが、修士一回生の時に読んだある戯曲 (シユードラカ作、『土の小車』(Mṛcchakatīkām) 第三幕、『インド集』所収、岩本裕訳参照) に、泥棒が邸宅に侵入する場面が出てきます。中で人が寝ています。さて、泥棒はその人が本当に寝ているのか、寝たふりをしているのか確かめなさいといけません。その「本当に寝ている」というのをその戯曲では、「勝義として寝ている」と表現していたのです。それはなるほどと思える体験で、とても印象に残っています。

三回生の時には印度哲学に服部正明先生、仏教学に梶山雄一先生、梵文学に大地原先生の三教授と、人文研に助手で荒牧典俊先生がおられました (拙著下巻「あとがき」九五二頁)。私の出たサンスクリットの授業は二つで、一つは梶山先生の仏典選集、もうひとつは大地原先生のサンスクリット中級です。テキストはランマン (Charles Rockwell Lanman, *A Sanskrit Reader*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1971. First published, 1884) です。後者は二つの理由で進みませんでした。一つは、ストライキです。もう一つは一番弟子の小林信彦先生でした。大地原先生は「秋になったら、小林信彦君という優秀な人が帰ってくるからその人に習いなさい」といって私たちからすると全然教えてくれないんです。それこそサンスクリットがわからない。特に重要な合成語 (コンバウンド) の種類さえもわからない。(これまた今から思えば完全にわれわれのせいなのですが。) そんな状況で秋を迎えることになります。ですから、前期の仏教の授業 (『中論釈』ブラサンナパター 第十六章) では、いくら夜も寝ずに予習しても九〇分の授業の半分ほどしか持ちません。秋本君と二人で「梶山先生すみません、半分しかできませんでした」と言うと、仏教学科には一年上の四回生がいまませんでしたのでそのあとの半分は、上級生や大学院生の先輩にバトンタッチになります。そして

ら、それまでゆっくり進んでいたのが俄然スピードアップして、それはそれでまた消化不良となりました。

しかしそんな中でもなんとかサンスクリットが多少「まし」になったのはやはり小林信彦先生との出会いによります。この先生はちゃんと天から降りてきて下さる天才なんです。そして「こうですよ、ああですよ」といつて細かく指導して、「だめですよ」ってだめ出しも厳しくて、動詞からの派生語はルート（語根）から覚えることと、合成語の解釈をいい加減にしないこととの二点を徹底してくださいました。特に修士一回生の時には、先ほど申した戯曲『土の小車』の講読で、いい加減な予習をして叱りつけられて「これではいけない」と思ったり、期末試験を受けたりののがよかったと思います。

## 五 櫻部建先生の『俱舎論』第五章随眠品講読

話が前後してしまいました。櫻部建先生とのつながりです。今回の訳本の「あとがき」（下巻、九四九頁）に書きましたが、先生は私が三回生の後期（一九七三年秋）に、大谷大学から非常勤講師として出講してくださいました。出講は二回目で、「二回目には医学部の学生もいた」と楽しそうに仰いました。テキストは、プラダン（Pradhan）本梵文一九六七年初版『俱舎論』第五章随眠品です。掲示板に参考文献として佐伯旭雅の『冠導本阿毘達磨俱舎論』と、ヤシヨミトラ注があったのを覚えています。（ただし私の力では、注まではとても読めませんでした。）先生は、そのとき、「第一章・第二章は私が翻訳しました。第三章も山口益・舟橋一哉両先生の和訳があります（ただしチベット訳よりの重訳）。第四章は舟橋先生が今授業でやっておられます。だから次は第五章です」という意味のことを言われました。きつと第五章をご自身で翻訳なさるおつもりだったのです。ただ結果的に第五章の翻訳は後に小谷先生と私とで出すことになりました（小谷信千代、本庄良文『俱舎論の原典研究 随眠品』大蔵出版、二〇〇七年）。櫻部先生との、また『俱舎論』との繋がりはそこで出来ました。晩年は優しくなれましたが、その頃はまだしょっちゅう学生を叱りつ

けておられました。私以外の先輩の場合も、自分の場合も、なぜ叱られるか少し分からないこともありました。私が当たったところで言いますと、“durgandha-ksatavat” (Pradhan, 282, 5: durgandha-ghrtavat?) というのが出てきました。分かりにくい単語で、「悪臭のする紫蘇」のように訳したら、先生が「なぜ紫蘇と訳しましたか」と言われるので、『国訳大藏經』の註(論部第十二卷、三六三頁註一〇七)にそう書いてありましたので」とお答えしました。それから櫻部先生は「国訳大藏經の脚註でそう言っているからといって、鵜呑みにしちゃだめだ」って叱られるんです。後で知ったのですが、舟橋一哉先生は「わたくしなど、四十年このかた俱舍論に親しんでいるが、今だに『国訳』を卒業していない」(中略)：「国訳」といっても、主として「国訳」の脚註のことである」(大谷大学佛教学会編『佛教学への道しるべ』文榮堂、一九八〇年、八三頁)と言っておられる脚註なんです。結局その脚註は間違いで、正解はそのとき誰にもよくわからなかったのですが、あとで舟橋一哉「梵藏所傳の資料よりする俱舍論隨眠品の註釋的研究——特に玄奘譯の本文批判を中心として——」(『山口博士還暦記念印度學佛教學論叢』法藏館、一九五五年、一四五—一五四頁)に「正解」が書いてあるのがわかりました。(また東京大学で修士論文を書いた中国人留学生がこの箇所を扱っておられるのをwebで見ましたが今回探すことができませんでした。)

質問されて無事オッケーを出してもらったのも覚えていますが、省略します。ともあれ、その授業のおかげで秋本君といっしょに『俱舍論』に親しみを覚えたのは確かなのです。また、四回生の時には卒論作成のため、あまり授業に出なかったのも、もしその半年がなければと考えると、その年に櫻部先生を京大に呼ばれた梶山先生のご配慮も肝に銘じておかねばならないと思っています。

卒業論文では、先ほど申した原始仏教に対する憧れから、パールの『長老偈・長老尼偈 (Thera & Therigāthā)』を選んで卒業させてもらいました。

## 六 修士論文の「失敗」

大学院に入り、修士一回生では毎日のようにサンスクリットやチベット語を読む授業があり、特に小林先生にしばらくついでに、体調は極めて不良ながら、学生として大変幸せだったのですが、二回生になって修士論文を書く段階でちよつと雲行きがあやしくなってきたのです。修士論文は、「初期仏教徒の正統バラモン教批判」という論題になっていて、規程により、京都大学文学部の書庫（当時の哲学科閲覧室）に入っています。先に申しましたように、もともと原始仏教に関心がありましたので、当時、荒牧典俊先生が力を入れておられたジャイナ教資料と対比する方法に影響を受け、初期仏教徒がバラモン教をどのように批判するかをまとめて提出したものです。どのような結論かと申しますと「バラモン教では輪廻をこえることはできない」ということが初期仏教徒の正統バラモン教批判の基本である」ということだったんです。

口頭試問の時、梶山先生ともう一人の先生はある程度好意的でした。けれども、大地原先生から「誰に向って論文を書いているのか。内々で日本人に向って書くものではない。それまでのインド学の流れがどうなっていて先人がこの問題についてどのように発言しているかをふまえた上で、それを問題にしているコミュニティにむかつて書くべきだ。君のはほとんどが日本人のものの引用で、Rhys Davids なども引かれていないではないか。」と厳しく批判されると場の雰囲気が一転しました。さらに「Louis Renou を引用しているが、どのようなつもりで引用したのかそれは後で尋ねる」と言われて実は内心進退窮まっていたが、幸か不幸か、その質問はそのまま沙汰やみとなりました。印度哲学の服部正明先生も「ドグマを捨てなさい」と諭されました。

さらに別の先生の評は「テーマとしてはよかったけれど改善の余地が多い」というもので、自分にとっては、反対票二、賛成票二、中間が一となりました。しかし自分の心には厳しい批判のほうが大きく残ったのです。



博士課程に進みましたが、一年間くらい何をすればよいかわからない、呆然と暮らすという状態におちいりました。しかも一学年下の後輩がみな優秀なので立つ瀬がありません。荒牧先生から「何をしているのか。大きな仕事をせよ」と叱咤された記憶があります。そこでやっと今日のテーマにつながるんですけども、「いくら何でもこのままではいかん」と思ったのであります。

## 七 『ウパーイカー』にたどり着くまで

幸い修士一回生のとき、トロントから帰ってこられて京都産業大学に就職された桂紹隆先生にチベット語を教えてくださいました。チベット語入門の担当はその前の学年までは佐藤長先生、次の学年からは御牧克己先生となつたので、実は桂先生にチベット語を習ったのは偶然にも私たちの学年だけです。その時のパンフレットがこの上なく簡潔で、しかも要点をはずしていない素晴らしい初級の文法書でした。現物を探し出したのですが、残念ながら行方不明になっています。文字から始まって「何々が」「何々を」「何々に」などの日本語の格助詞のようなものや、接続詞や動詞に至るまで、それこそ基本中の基本を要領よくまとめていただいておりますので、我々のような者でも非常にわかりやすかった。それで後期からでしたか、梶山先生が（今から思えば講談社の『原始仏典』全十冊のうちの一冊になる）『ブッダチャリタ』のチベット語訳を授業で扱われたんですけれども、先輩にいろいろ教えてもらいさえすれば何とか付いていけるぐらいになりました。このようなことがあって、いちおうチベット語の入門は果たしていました。これが『ウパーイカー』に至る必須条件の一つでした。

また第二に、もともと原始仏教（阿含経典）に対して憧れがあったこと、それから第三に、ちょっと間をあいていましたけれど『俱舍論』を読むことには関心があったということ、さらには、第四にサンスクリットも一応やっていたこと、それから第五に漢文も日本人なりに解るといことがありました。以上で、『ウパーイカー』を読む素地は

いちおう出来上がっております。

どういう経緯で櫻部先生の研究に辿りついたか詳しくは思い出せませんが、『俱舍論』にシヤマタデーヴァの『ウパーイカー』というチベット訳でのみ残る註釈書があるということと、それに関する論文があるということを櫻部先生から直接あるいは間接に聞いていたのです。

『ウパーイカー』がどんな本かということについては、櫻部先生の『俱舍論の研究』（法藏館、一九六九年初版、三七—四〇頁）にも紹介がありますが、『俱舍論』に引用される阿含經典や律、論などの断片について、その本文の全体または一部をあげ、また時として本文中の重要語、—— *buddha* とか *bhagavat* とか、あるいは *arjuna* (*Abhidharmakośakārikā* VII, 36a) など——についても、参考になる用例がある場合にはそれを示す、というやり方を繰り返すものであり、その重要性は『俱舍論』の本文理解に対して助けとなるということもあるが、それ以上に豊かな説一切有部系の阿含資料を提供する点にある、とこういうことになります（拙著上巻、序論十五頁）。

これを櫻部先生がお若い時に研究しておられたわけでありまして、二つ論文があります。

第一は、「シヤマタデーヴァの依用する中阿含について」（『山口益博士還暦記念印度學佛教學論叢』法藏館、一九五五年、一五五—二六一頁）です。シヤマタデーヴァの『俱舍論註』に引用される中阿含の諸經、特に、ウッターナ（撰頌）を初めとする、組織をあらわす記述に注目し、漢訳『中阿含』（T. 26）と対比して、「いちいちの単經の經題からいっても、全体の組織からいっても、個々の經の内容からいっても、極めて親近の關係にあり、両者は、同一原本よりの異訳と見得る程ではないにしても、明らかに同一系統の、しかも極めて類似した異本と見ることができると結論づけたものです。（これは少し表現上の訂正を要します）。

第二は、「シヤマタデーヴァの俱舍論註について」（『印度學佛教學研究』四—二、一九五六年、四六二—四六三頁）で、第一章界品冒頭の内容紹介です。『俱舍論』の引用經典の典拠調べについては、古くから法幢『俱舍論稽古』（T. 2252）、

佐伯旭雅『冠導俱舍論』、ド・ラ・ヴァレ・ブサンのフランス語訳の註、『国訳一切経』中の西義雄『国訳俱舍論』がありますので、それを掲示した上で、シャマタデーヴァの引用資料を明確にしたものです。

その後、櫻部先生が身近な学生さんたちに「このシャマタデーヴァの『俱舍論註』は研究するに値する重要なテキストなので、君やってみませんか」と言われたようですが、櫻部先生が「ただし一生かかりますよ」と言われた瞬間にみんな尻ごみしてしまうということをまた秋本君から聞きました。その時、私はそれこそ何をどうしろいいかわからないという状況でしたので、これの研究をやらうと思いついたのです（拙著下巻「あとがき」九四九―九五〇頁）。他の人がやることはやりたくない。他の人がやらないと言ったらやりたくなる。結構へそまがりなんです。ただまだチベット語が満足に読めるわけではなかったので、最初は本文を手書きで写して、その手書きを読んでいったというところでありますが、後々になると、あまりやつてはいけないことなんでしょうけども、北京版のテキストを二行ずつカッターで切って一頁に四行ずつスティック糊で貼り付けるということをやりながらちよつとずつ研究発表をしていったわけでありす。

## 八 『ウバーイカー』の資料比定と部分訳

その最初の研究発表が、さきほど申しました秋本勝君の三世実有説の部分の翻訳の範囲で出てくるお経についてシヤマタデーヴァがどう言っているかをつけ加えるかたちで『南都仏教』に出させていただいたものです。一九七八年くらいの年号になっているかと思いますが、実際は年が改まったぐらいに出たと思います。もう三十何年経つわけがあります。

その後、少しずつ内容紹介と部分訳を重ねていきましたが、最初のころ、「櫻部先生は第一章を続けてやられるかもしれない」と思いましたので、第五章の三世実有説部分の紹介の次は、冒頭からやることは控えて、第二章根品か

らやっています。そうして、「どうも櫻部先生は界品についてはおやりにならない」と確認してから界品を扱ったわけがあります。

## 九 『俱舎論所依阿含全表Ⅰ』

ところが一九八四年のお正月ごろ、ある国立大学の研究室の助手の方から「『俱舎論』に引用される阿含經典について、文部省（当時）から科学研究費をもらって成果を出したいと思うので、本庄さんの研究をまとめて送ってくれないか」という手紙がきました。そこで、私は私で『俱舎論所依阿含全表Ⅰ』（一九八四）という本を自費出版し、『ウパーイカー』で引かれる資料比定の結果を集大成したわけであります。その時に白寄顕成、森茂男の両先輩が校正を助けてくださいました。こちらは朝から晩までタイプライターを叩き続けて、たしか十日か二週間くらいで完成したと思います。それはその『全表』の中に書いてありますけれど、北京版、デルゲ版などのチベット訳諸版の頭出しがどこか、法幢、旭雅、ド・ラ・ヴァレ・ブサンのどこで典拠が示されているか、シャマタデーヴァの引用している資料が何にあたるかを表にしたわけであります。書名の最後に「Ⅰ」とありますのは、逆引き索引を作ろうとしたからです。逆引き索引は元ゼミ生に試作品を作ってもらっていますが、現在に至るまで発表できていません。ただし、引用される「長阿含」「中阿含」「相應阿含」など、文献ごとの資料については紹介論文を発表しています（拙著上巻「序論」二二頁）。

『全表』出版当時、櫻部先生を囲む『俱舎論』の輪読会に参加していて大谷大学に出入りしておりましたので、大谷大学の先生方や、知り合いの方が沢山買って下さいました。人によっては二〇冊ほどの方もありました。大変助かりました。またある方の出版記念の会合のとき、櫻部先生が、好意的に私の出版の紹介をしてくださいました。

## 十全訳へ

『全表』の出版までは、『俱舍論』のどの箇所の經典引用について先人が典拠として何を挙げているか、シャマタデーヴァがどういう資料をあげていて、結局は誰が言っている典拠と合致するか、などの調査結果を示すのと、適宜現代語訳を出すだけでした。それで全巻に亘るつもりだったんですが、資料比定については『全表』の出版で基本的に終わりましたので、後はもう訳すしなくなっていました。

それまでは、第二、第五、第七、第八、第九章については、訳したり訳していなかったりの資料紹介でしたので、『全表』出版の後には第一、第三、第四、第六章についてはできるだけ全訳ということで、進めました。その後、第二章以下の、部分訳に終わった箇所は、補訳して、二〇〇〇年にはほぼ全訳を果たすことができました。ただし、このような不統一な状態ですので最後までとめる時に統一を取るのに大変苦労しました。

## 十一 浪人と神戸女子大学教員

その間のことを申しますと、京都大学の助手（一九七八―一九八〇）を二年で辞めて、そのあと、寺の手伝い以外に定職がない期間が九年半続きました。このシャマタデーヴァの『俱舍論註』はお経の引用ばかりですので、断片的な時間しかなくても、けっこうストレスなく研究を進めることができました。しかし、『南都仏教』にこれを出し、また『佛教研究』にこれを出し、浄土宗の学会誌にこれを出しという調子で、縁のあるところであちこちに出しましたので、自分でもどこで何を出したかわからなくなるくらいになってしまいました。

けれども平成元年（一九八九）の九月一日から神戸女子大の教員に採用していただいたおかげで学内の紀要に研究結果を連載することができたのが大きかったです。飛躍的に発表する分量がふえました。けれども平成十六年（二

〇〇四）三月まででそこをやめてしまったんです。辞めたのは、住職である父が亡くなり、神戸女子大の仕事と、お寺の仕事の両方というのが体力的にもたなくなつたからということもありますが、特に、当時、出版しないといけな  
いものが三つありましたのに、最後の一年間、勉強のために机に座つた記憶がほとんどない状態だつたからです。三  
つというのは、第一は櫻部先生を囲む輪読会の『俱舍論の原典研究 智品・定品』の翻訳、第二は、随眠品の翻訳、  
第三に『ウバーイカー』の研究です。最初の二つは私が最終チェックすると言いながら、長らく放置していたのです。  
何とか二〇〇四年と、二〇〇七年に終えることができましたが、第三の仕事に移ろうとした矢先、二〇〇八年から自  
分にとっては大きなプロジェクトに関わることになりました。（このあたりから少し先までは、一貫して『ウバーイカー』  
の出版が遅れたことの言い訳になっています。）

## 十二 法然上人八百年遠忌記念事業

それは平成二十三年（二〇一一）に迎える法然上人八百年遠忌に向けた左のような記念事業の一部です。二つあり、  
第一は知恩院から漢字カタカナ混じりで出ていた『元祖大師御法語』上下二巻を現代風表記に直すこと、第二はそれ  
を現代語訳することです。後者はもちろんですが、前者も単純作業ながら意外に時間と手間がかかりました。

### ① 総本山知恩院『平成新版元祖大師御法語』上・下（二〇〇九年）

### ② 『平成新版元祖大師御法語』編集委員会「『平成新版元祖大師御法語』編集作業報告」（知恩院浄土宗学研究 所『浄土宗学研究』第三十六号、二〇一〇年、一五七—一九一頁）

### ③ 知恩院浄土宗学研究所編『法然上人のお言葉——元祖大師御法語——』（総本山知恩院布教師会、二〇一〇年）

### ④ 本庄良文・中御門敬教・伊藤茂樹・齋藤蒙光「『法然上人のお言葉——元祖大師御法語——』解釈上の諸問

題」（知恩院浄土宗学研究『八百年遠忌記念法然上人研究論文集』、二〇一一年、二三九—二八七頁）

また同じ時期に、記念論集の出版が重なり、この機会にと思い、少し無理をして「法然における諸行往生の可否」の問題について左のような論文を発表しました。その趣旨は、「法然はきわめてわずかながら、廻向による諸行往生の可能性を理論的に認めていた」と論証しようとしたもので、平雅行氏、安達俊英氏などの諸行往生完全否定説を、純粹に仏教教理に従って批判しようとしたものです。

① 『選択集』第四・第十二章における「廢立」の語義」知恩院浄土宗学研究所『八百年遠忌記念法然上人研究論文集』二〇一一年、一四三—一六五頁。

② 『選択集』第十三章における「不可得生」の經典解釈法」『浄土宗学研究』三七号、二〇一一年、二三—四一頁。

③ 「經の文言と宗義——部派佛教から『選択集』へ」『日本佛教學會年報』七六号、二〇一一年、一〇九—一二五頁。

④ 「法然における諸行往生の「否定」——論点の整理——」『法然上人八〇〇年大遠忌記念 法然仏教とその可能性』二〇一二年、二九七—三一九頁。

⑤ 『選択集』第二章における千中無一論——諸行往生の可否に関連して——」『佛教大学仏教学部論集』九六号、二〇一二年、三一—四二頁。

⑥ 『選択集』第六章における特留念仏釈と諸行往生の可否——平雅行説の検討——」『福原隆善先生古稀記念論集 仏法僧論集』下巻、二〇一三年、七二—七二六頁。

⑦ 「了慧道光による『選択集』第十三章「不可得生」の解釈」『廣川堯敏教授古稀記念論集 浄土教と佛教』、二〇一四年、四七五—四八七頁。

⑧ 「『選択集』第十二章における随自意・随他意説——諸行往生の可能性に関する善裕昭説の検討——」藤本浄

彦先生古稀記念論文集刊行会編『法然仏教の諸相』、二〇一四年、四七五―四八四頁。

### 十三 出版へ（井上敏光さんと協力者のみなさん）

右と相前後して、二〇一〇年佛教大学の特別任用教授の人事があり、寺院住職と非常勤を少しこなすだけであった時期よりもやはり仕事が増えて『ウパーイカー』出版への動きはまた少し鈍化してしまいました。しかしいつまでもぐずぐずしておれない事態が起きます。それはずっと編集を担当して下さっていた大蔵出版の井上敏光さんという有能な編集者が「近く退社する」とおっしゃったことです。

また話が前後しますが、『ウパーイカー』の出版については二〇〇一年に佐々木閑君（花園大学）が、井上さんにひき合わせてくれていたのです（拙著下巻、「あとがき」九五〇頁）。その退社の知らせを受けてもなかなか前に進みませんでした。周囲の方々に迷惑をかけながら出版の準備をしたわけでありました。ここに來てくださったっている方々の中にも迷惑をおかけした方があるわけで、佛教大学の大学院生、および修了生、大谷大学の方々など、お名前は本に書かせて頂いた通りです（拙著下巻「あとがき」九五二頁）。とくに索引については、梶山雄一先生の論文集を編集しておられた吹田隆道先生にノウハウを教えていただいて、大いに能率が上がりました。それは出版直前の文字データのうち、各ページ先頭にページの数字を入れ、索引に採る用語を残して他の文字を削除し、残った各用語にフリガナとページの数字を配してから五十音順に並べるというもので、もし、索引に採る語をいちいち入力していたら大変なことになっていたと思います。

拙著の発行日について一言申し上げます。日付が二〇一四年六月九日となっております。私は文献学をやっているがら櫻部先生のお詠みになった俳句を随眠品の「あとがき」（『俱舎論の原典研究 随眠品』大蔵出版、二〇〇七年、二八八頁）で間違って引用してしまったんです。「秋風や毘曇読む娘の耳飾り」っていう俳句なんですが、それは本当は



「秋風や毘曇読む娘のイヤリング」だったんです。今回は間違っていないように祈っているのですが、六月九日は櫻部先生のご命日なんです。しかもこの日は三回忌であります。本当は五月下旬の予定だったんですけども、担当を井上さんから引き継がれた上田鉄也さんに希望を伝えましたら、社長さんに相談して下さり、OKが出ましたのでその日になりました。また下巻の発行日は次の月命日にして頂きました。これはわざと「あとがき」に書かなかったんです。口伝でございますので皆さんの胸の奥にしまっておいていただければありがたいです。

#### 十四 龍樹『十住毘婆沙論』の引用らしきもの

時間が過ぎていますが一点だけ。内容についてはほとんど何も申し上げませんでした。他ならぬ大谷大学です。ちよつと報告いたします。かねてから『十住毘婆沙論』の著者は漢訳では龍樹だというのがどうかという問題があります。そこで『ウパーイカー』の第三章世品の二十四番目の資料、世品[3024]に注目したいのです。仏・菩薩の三十二相八十種好について著者シャマタデーヴァが種々の資料を引用するところがあります。ここにだけ大乘經典、『二万五千頌般若』が引用されます。この資料の一行目、「須菩提よ、如来はこれら〔八十種〕好を具えておられる」とあるのがその經典引用の最後の行です（拙著上巻、三三八頁）。次に、「まさにそれと同内容のことを別の場所です長老龍樹が別の表現で解説する」とあって、傍線が引いてあります。こちらの勝手な都合を言えば、「別の箇所です」と言わずに『十住毘婆沙論』に」とはつきり言ってくれたらよいのに言ってくれていないのです。ただ、内容はけっこう合致しそうですね。特に印象深いのは後ろの方なんです。漢訳では散文になっていますけれど、チベット訳では韻文になっています。「是名八十種好 以此八十種好 間雜莊嚴 三十二相」の対応箇所を見ると、「三十二相を輝かすところの佛の好は、これら八十の見事なものであり、一切の善逝を輝かす」（三三九頁）となっています。もしこれが私のわがままな希望通り合致しているとなれば『十住毘婆沙論』の著者が龍樹であるということが、インド

系の資料においても確認されるということになりそうです。

## 十五 今後の課題

今回の訳は、試訳というべきもので、もう一度原文と綿密に照らし合わせて訂正したかったんですが、もしそうするとさらにあと三十年かかりそうだったので、結局実は十分やれていないんです。この点は、『ウパイカー』の全体が日本語で見通せるということに免じてお許しいただきたいと思っています。個々の資料についての厳密な比較対照については、将来の世代に委ねたいと考えます。今回はその候補として『十住毘婆沙論』に関連する資料を紹介させていただきました。

また「長阿含」「中阿含」「相應阿含」など、個々の文献についての論文はすでに発表していますが（拙著上巻「序論」二二頁）、これをまとめるなり、改定するなりの仕事が残っています。実は、これらの研究については台湾の法鼓佛教學院の法施比丘尼（Dhammadina）さん（拙著下巻「あとがき」九五―一頁）のお世話で、一部英訳の話があり、将来は英語で公表できるかもしれません。

以上、内容よりも外枠の話ばかりでご期待に添えなかったかと思います。特に最後のほうは出版が遅れた言い訳ばかりになっています。ただ、案外このような裏話のほうがよかったのかもしれない。ご清聴ありがとうございました。

（二〇一四年二月四日、大谷大学尋源講堂で行われた公開講演に基づく。）